霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第137号
令和3年10月20日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

霊宝館開館100周年記念式典　本館 放光閣にて御法楽の様子

高野山霊宝館長に就任して

この度令和三年七月五日付で霊宝館長になりました大森照龍（おおもりしょりゅう）です。私は昭和六十年に金剛峯寺に就職し、初めての配属がこの霊宝館でした。ここで文化財についての知識や取り扱いを学び、二十年間奉職させていただき、それから十六年の歳月が流れ今度は館長として就任いたしました。私の文化財に対する考え方は「文化財は生きている。」ということです。文化財に携わる者は、物言わぬ文化財に対して状態やコンディションを気遣い、展示、調査していくのが仕事だと思います。やがてその成果によって展覧会を開き、多くの人に文化財の歴史・背景をご理解いただき、弘法大師の開山より多くの宝物を守ってきた高野山の現状を知っていただければ幸いです。またその成果が高野山参拝の礎になって、多くの人が高野山に訪れ、大師の御教えを感受し、穏やかな暮らしを営める世の中になることを切望いたします。

ただいま霊宝館は一〇〇周年記念として十一月二十八日まで特別展を開催しています。普段見学できないような貴重な文化財を出陳していますので、是非ご来館ください。このようなご時世なのでしっかり感染対策の上、ご来館いただけたら職員一同幸いです。

高野山霊宝館長　大森　照龍

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！

第137号　目次

高野山霊宝館開館100周年記念大宝蔵展……2～3
令和三年度冬期平常展……4～5
高野山の考古学（二十五）……6～7
収蔵品の紹介108……8
高野山の古建築 第三十八回……9
高野山の文書（二十二）……10
高野山の生き物 第四回……11
高野山霊宝館からのお知らせ……12

高野山霊宝館からのお知らせ

◎外部展貸し出し情報

●和歌山県立博物館「きのくにの名宝―和歌山県の国宝・重要文化財―」
令和3年10月16日(土)～11月23日(火)(祝)
国宝　続宝簡集巻20　南部荘年貢送文　金剛峯寺
国宝　又続宝簡集巻50　大内氏奉行衆奉書案　金剛峯寺
国宝　又続宝簡集巻78下　阿弓河荘上村百姓等申状　金剛峯寺
国宝　又続宝簡集巻88　官省符荘二十箇村百姓等起請文案　金剛峯寺
重文　弘法大師・丹生高野両明神像（問答講本尊）　金剛峯寺
未指定　太政官符　金剛峯寺
未指定　遺告諸弟子等　金剛峯寺
未指定　紀伊国井上荘絵図　宝寿院

●MOA美術館「大蒔絵展」
令和4年3月26日(土)～5月8日(日)
国宝　澤千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃　金剛峯寺
重文　花蝶蒔絵念珠箱　金剛峯寺

●奈良国立博物館　東・西新館「特別展　大安寺のすべて―天平のみほとけと祈り―」
令和4年4月23日(土)～6月19日(日)
国宝　勤操僧正像　普門院

●三井記念美術館「大蒔絵展」
令和4年10月1日(土)～11月13日(日)
国宝　澤千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃　金剛峯寺
重文　花蝶蒔絵念珠箱　金剛峯寺

◎公式YouTubeが開設

霊宝館の公式YouTubeが開設されました。現在の展覧会の紹介動画等を公開中です。

【公式】高野山霊宝館

◎YouTube『高野山の法話』

YouTube「高野山の法話」が霊宝館にて撮影されました。11月より配信予定です。是非ともご覧ください。

◎『承久記絵巻』全六巻を収蔵

このたび竜光院より『承久記絵巻』全六巻を収蔵しました。承久の乱の経緯が描かれた唯一の絵巻物です。（次号以降特集予定）

未指定　『承久記絵巻』　竜光院

また、9月1日より『承久記絵巻』の画像データも併せて霊宝館に寄託されました。写真貸出・掲載につきましては霊宝館までお問合せください。

◎御芳志ご寄附のお礼とご報告

以下のとおりご寄附いただきました。

兵庫県　匿名希望（金　三百万円）
和歌山県　匿名希望（金　十二万円）

ご寄附いただきました浄財は公益目的事業に活用させていただきます。心より感謝申し上げます。

◎開館一〇〇周年記念図録好評発売中

図録

特別ケース付き4，500円（税込）

◎友の会会員募集

- 会員証提示で会員本人様のみ霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- 霊宝館発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉
一般会員（個人）　3，000円
賛助会員（法人）　30，000円

皆様のご入会をお待ちしております。

お問い合せ先　高野山霊宝館　TEL 0736―56―2029㈹

高野山霊宝館開館一〇〇周年記念大宝蔵展のお知らせ

本館 紫雲殿にて集合写真

記念式典

四月十七日より開催されている高野山霊宝館開館一〇〇周年記念大宝蔵展開催に先立ち、四月十五日に開館記念式典が行われました。午前十時より、葛西光義高野山真言宗管長猊下が御導師を務め霊宝館収蔵の諸仏に御法楽を捧げました。その後、添田隆昭宗務総長（当時）の挨拶、宮田永明高野山住職会会長、平野嘉也高野町長より祝辞をいただきました。その後、山口文章霊宝館長（当時）より挨拶があり、葛西管長猊下、添田総長、宮田住職会会長、平野町長の四名によるテープカットが行われ、内覧会が開催されました。

本館 放光閣にてテープカットの様子

展示風景

今回の霊宝館開館一〇〇周年記念大宝蔵展では、孔雀明王像（重文・金剛峯寺）をはじめとする快慶作品・運慶作の八大童子立像（国宝・金剛峯寺）・高野山に伝わる三大秘宝を通期で展示しております。十一月二十八日までは第四期となり、仏涅槃図（国宝・金剛峯寺）をはじめ、浅井長政夫人像（重文・持明院）、十一面観音立像（重文・宝亀院）なども展示しております。

新館１室

新館２室

新館３室

ミュージアムトーク

今回の展覧会に合わせミュージアムトークが行われました。

●霊宝館長スペシャルギャラリートーク
5月22日(土)　5月29日(土)
7月3日(土)

●ミュージアムトーク
6月18日(金)・19日(土)
7月16日(金)・17日(土)
8月20日(金)・21日(土)
9月17日(金)・18日(土)
10月18日(金)・19日(土)

また、以下の日程でミュージアムトークが行われます。
11月19日(金)・20日(土)
各14時より約1時間
定員約10名
※受付は開始の30分前より

霊宝館長スペシャルギャラリートークの様子

特別朱印

開館一〇〇周年を記念して二種類の特別朱印を授与しております。
各５００円、霊宝館窓口にて受付しております。

令和三年度 冬期平常展

「密教の美術」

令和3年12月4日(月)～令和4年4月10日(日)

前期　令和3年12月4日(月)～令和4年2月13日(日)
後期　令和4年2月15日(火)～4月10日(日)
休館日　12月28日(火)～1月4日(火)

高野山は、弘仁七年（八一六）、弘法大師空海により開創されて以来、一二〇〇年もの歴史があります。山上には、総本山金剛峯寺のほか、一一七の寺院があり、多くの文化財が伝わっています。高野山霊宝館は、これら山内の寺院に伝わる文化財の収蔵、保管、展示を行っています。当展覧会では、奥之院御廟周辺から出土した埋蔵文化財を中心に展示します。

主な展示品

■絵画

重文	高野大師行状図画　巻一、巻二	地蔵院
重文	十巻抄　巻一、巻二	圓通寺
未指定	承久記絵巻　巻一	竜光院
未指定	愛染明王像（旧 金剛峯寺囲炉裏間本尊）	金剛峯寺
未指定	如法愛染曼荼羅図	金剛峯寺〔後期〕
未指定	投華―密教に入る（高山辰雄筆）	金剛峯寺
未指定	高野山内絵図	西南院
未指定	両界曼荼羅図（血曼荼羅復元）	金剛峯寺

未指定　如法愛染曼荼羅図　金剛峯寺

重文　鋳出銅板三尊仏像（南保又二郎納骨遺品のうち）　金剛峯寺
元々は銅板を被せて、上から叩き出して製作する押出仏の型であったが、その後そのものが仏像として信仰の対象となり、奥之院に埋納。

未指定　投華―密教に入る（高山辰雄筆）　金剛峯寺

重文　陶製経外容器（高野山奥之院出土品　比丘尼法薬経塚出土品のうち）　金剛峯寺
比丘尼法薬奉納の経筒の内部からは、経典などとともに、絹に描かれた曼荼羅が出土。

重文　金剛界種子曼荼羅（左）、胎蔵界種子曼荼羅（右）（高野山奥之院出土品　比丘尼法薬経塚出土品のうち）　金剛峯寺

重文　金銅光背（高野山奥之院出土品　御廟及び周辺出土品のうち）　金剛峯寺
高野山の奥之院御廟周辺から出土した仏像の光背。高野山開創は平安時代であるが、それ以前の飛鳥～白鳳時代のもの。

重文　観普賢菩薩行法経（比丘尼法薬経塚出土品のうち）　金剛峯寺
当経は、普賢菩薩を観ずる方法と、六根の罪を懺悔する方法などを述べられている。

■書跡

国宝	紺紙金銀字一切経（中尊寺経）	金剛峯寺
未指定	綸旨院宣	金剛峯寺〔前期〕
未指定	聾瞽指帰（複製）	霊宝館

■工芸

重文	金銅仏具	金剛峯寺
未指定	拝観人心得	霊宝館

■考古

重文	南保又二郎納骨遺品	金剛峯寺
重文	高野山奥之院出土品（比丘尼法薬経塚出土品・御廟及び周辺出土品・灯籠堂及び周辺出土品）	金剛峯寺

■民俗

国登録有形民俗文化財	高野山奉納小型木製五輪塔及び関連資料	圓通寺

※文化財の保存上、展示品が替わる場合があります。
※期間中、一部展示替を行います。
※コロナの感染状況により、会期の変更、休館、拝観制限を行う場合があります。

今後の展覧会予定

企画展「鎌倉時代の高野山」（仮題）

令和4年4月16日(土)～7月3日(日)

高野山の考古学（二十五）

高野山の地鎮遺構②

―宝性院（ほうしょういん）跡（後編）―

大阪大谷大学文学部歴史文化学科
狭川 真一

前回（第一三四号）でご紹介した、宝性院跡から出土した江戸時代の地鎮遺構はどのような作法で行われたものなのか、奈良大学教授だった故水野正好先生が読み解かれた遺構の性格を参考にしながら、述べていくことにしましょう。

地鎮具の配置

地鎮具を納めた穴（遺構）は、調査地内の中程で確認された東西七間、南北四間の建物を囲むように四基、建物の中央北寄りに一基の計五基が出土しましたが、そのうち北西部の一基を除く四基が当初の位置を留めていました。こうした配置から、建物建設予定地を結界した遺構であることが理解できます。以下で具体的にみてゆきますが、説明の便宜上仮に北東隅を遺構①、南東を遺構②、南西を遺構③、北西を遺構④、中央付近のものを遺構⑤と呼んでおきます。このなかの遺構⑤は建物が建ってしまうと設置できないため、これら一連の遺構は建物造営以前に埋置されたことが分かります。また、この配置は単に建設予定地の周囲と中程に置いただけなのかというと、実は一定の法則にしたがって配置されたことが理解できたのです。

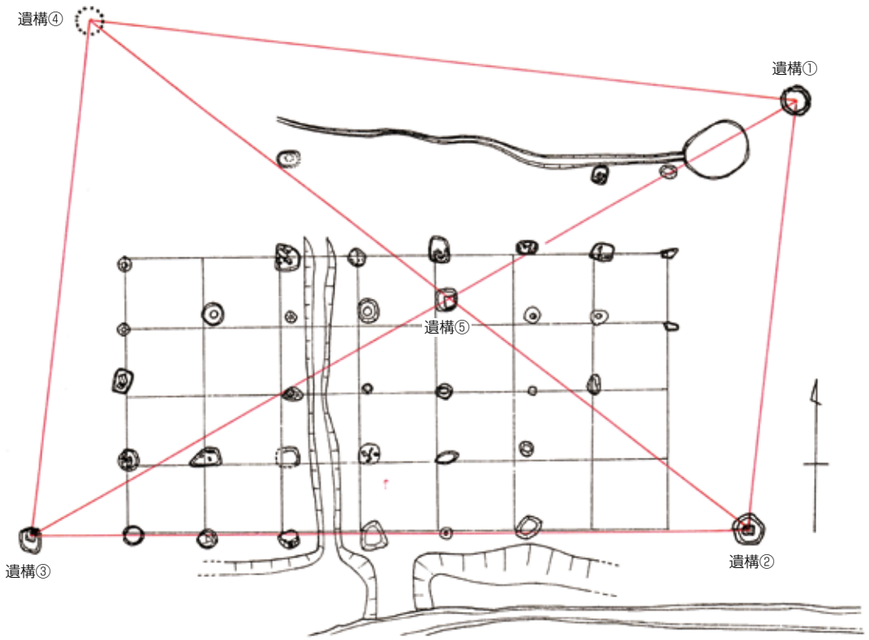
では挿図を見てください。当初の位置のまま確認された遺構①と遺構③を結んだ中程に遺構⑤を置いているのが分かります。そうすると、遺構②と遺構⑤を結んだ延長線上に、①‐⑤‐③と同じ比率で遺構④の位置を推測できます。ここには後に池が造営されたため、遺構④は消滅し、遺物だけが池の中から出土したのでしょう。

さらに建物との関係を見てみますと、建物の南辺に並ぶ東西方向の柱の延長上に遺構②と③が置かれ、それぞれは建物の角の柱からほぼ同じ距離に作られています。このことから地鎮の作法を行う段階で、建物はこの結界の南端に寄せて建てることを考えていたと理解できます。

つまり、ここで紹介した地鎮遺構は一定の作法にしたがって配置されたものであり、その目的は大きな建物を建設するためであったと理解できるのです。この調査地内からは他にも建物遺構が見つかっていますが、事前に地鎮作法を行っているのはここだけですので、この建物が宝性院の中できわめて重要な存在であったことを教えてくれます。

地鎮具の中身

次に各遺構から見つかった五枚の小皿の中に、何を納めてお祀りを行ったのかが知りたいところです。しかし発掘調査で出土した時にはすべて土になっていて、中身を推定することはできませんでした。ところが、東大阪市の真言宗千手寺住職だった故 木下密運先生が架蔵されていた『屋敷地取作法』と題する書物に、その内容が詳しく書かれていることが分かりました。この本は江戸時代前期の承応二年（一六五三）に「秀意」という人物が、「南院本」と「道意本」を参照して書写したものと記されています。ここで紹介している地鎮遺構が埋置された時期に近いものでもあるため、この本の必要箇所を抜粋して紹介します。



挿図　地鎮遺稿配置図

まず、「一、支度用意ノ物」という項目に「長八寸廣一寸二分ノ札五枚八寸、足打五枚、五穀二合、散米白二合、小土器廿五、大土器一ッ、（以下略）」とあり、次に「八寸ノ足打ニ土器ヲ五ッ并テ一ニハ五穀ノ粥、一ニハ切華、一ニハ抹香、一ニハ散米銀錢切テ入レル、一ニハ味支盛也」と見えます。足打とは脚付の折敷のことです。今回見つかった折敷は脚が無いタイプでしたから、脚部が別に作られた折敷を利用し、埋納時には折敷部分だけを納めたと推測できます。その足打は五枚用意し、さらに小土器を二十五用意するとしています。つまり折敷一つに対して五枚ずつとなりますので、まさにここで出土したものと一致すると言えます。その小皿の中身は、五穀の粥、切花、抹香、お米、味支（酒）を盛るとあります。また最初に書かれている「長八寸廣一寸二分ノ札五枚八寸」は、それぞれ折敷を納める穴（遺構）に立てる札のことで、「一、札書様」の項目に「中央（バン／梵字）一字計リ也、東（ウーン／梵字）本来無東西、南（タラーク／梵字）悟故十方空、西（キリーク／梵字）何處有南北、北（アク／梵字）迷故三界城、如是五本用意ス」とあります。中央は金剛界大日如来、四方はそれぞれの四方仏をお祀りし、そこに記載された偈頌（げじゅ／仏教の教えを詩句で表したもの）から北→南→東→西の順に祀られたこともうかがえます。

写真　遺構⑤検出状況（南から撮影）

またこの『屋敷地取作法』は、真言宗中院流に伝わったものであることも判明しています。このことから、今回の遺構は中院流の作法にしたがって正しく実行された地鎮祭祀の跡と特定できたのです。

これほど具体的に諸記録と一致する遺構や遺物は珍しく、貴重な発見例の一つとなりました。

【参考文献】
水野正好　一九八二「屋敷地取作法と地鎮の考古学」『高野山発掘調査報告書』（財）元興寺文化財研究所

収蔵品の紹介 108

拝観人心得（はいかんにんこころえ） 一枚

木製　大正～昭和時代

霊宝館蔵　縦四四・三cm　横一九七・〇cm

『拝観人心得』（全体）

『拝観人心得』（部分）

今回ご紹介する「拝観人心得」は、開館当初、拝観者に拝観ルールを告示したものです。その内容は次のとおりです。

一　拝観人は拝観券を館に入る時看守（かんしゅ）に示し出る時看守に渡さるべし（拝観券を職員に提示し、帰る際には拝観券を返してください。）

一　拝観券を携（たずさ）ふるも狂疾（きょうしつ）或は酣酔者（かんすいしゃ）と認むる時は館に入ることを拒絶し又は退場を要求すべし（大騒ぎする人、酔っぱらいは拝観をお断りします。）

一　拝観人は外来履物のままにて館に入るべからず（土足禁止です。）

一　拝観人は外套（がいとう）及帽子を脱し裾揚（すそあ）げをおろさるべし（コート、帽子を脱いで、ズボンの裾はまくったままにしないでください。）

一　拝観人は杖傘又は手荷物等を携帯して館に入るべからず但小形の手提鞄袋（てさげかばんふくろ）等係員の容認せるものは此限りにあらず（杖や傘、また大きな荷物などは館内に持ち込めません。）

一　本館は仏像等を安置せるを以て拝観人は相当の敬意を以て拝観されたし（展示している仏さまにはお性根が入っています。静かに敬意をもってご参拝ください。）

一　館内において万年筆を使用すべからず（インクが飛び散る恐れがある万年筆などの筆記用具は使用しないでください。）

一　畜類（ちくるい）を伴ひ館に入るべからず（ペットは入館できません。）

一　館内にて喫煙又は飲食すべからず（喫煙、飲食はできません。）

一　拝観人許容なくして館内において撮影又は模写すべからず（撮影、模写はできません。）

一　拝観人は大声を発し又は喧噪（けんそう）すべからず（大きな声を出し、騒がないでください。）

一　拝観人前諸条に違背する時は拝観を拒絶し又は退場を要求すべし（前諸条に違反する人は入館をお断りします。）

一　拝観人若し仏像物品又は建造物を汚損又は毀損（きそん）したる時は相当の代償を要求す（仏像や建物を汚したり壊した場合は、弁償してください。）

一　前諸条は拝観人を了知せるものと看做（みな）す（前諸条はご存じであるとして対応させていただきます。）

以上

ほとんどの条項が、現在の高野山霊宝館をご拝観していただく際に、拝観者の皆様にお願いしているもので、その他の博物館でも拝観時の基本的なルールとなっています。時代背景もあるでしょうが、一読すると結構厳しめの、上から目線の文体で書かれているような気もしますが、他の拝観者に迷惑をかけないように、文化財を静かに拝観しましょうと呼びかけているように見て取れます。おそらく、開館当初は、まだ博物館というものが珍しく、拝観したことのある人も少なかったことから、初めて高野山霊宝館に訪れる人にも、わざわざ詳細に書き記して掲示したのでしょう。（鳥羽正剛）

連載

高野山の古建築　第三十八回

重要文化財　清浄心院　佐竹義重霊屋（さたけよししげたまや）

鳴海　祥博

佐竹義重霊屋の全景　正面三間、側面一間、切妻造り、檜皮葺き。正面中央間が扉で、その他の柱間には、49本の卒塔婆が隙間無く、びっしり建て並べられている。

佐竹家墓所　正面が秋田佐竹家初代義宣の墓石。卒塔婆形の石柵で囲われ、正面に鳥居が建つのは「大名墓」の基本形。墓石の奥に義重霊屋の屋根が少し見える。

霊屋の側面詳細　頭貫の木鼻には立体的な浮き彫り彫刻が施され、卒塔婆には梵字が刻まれている。部分的に彩色が残り、かつては華やかだったに違いない。

霊屋の正面詳細　中央間だけが丸柱で、ここに「常陸国佐竹為義重逆修造立之」「慶長四己亥十月十五日」と刻まれている。

お大師さまの御廟のある奥之院への参道は、一の橋から中の橋、御廟の橋へと約二km続き、鬱蒼とした杉木立とともに無数の墓石が建ち並んでいます。

一の橋から二百mほど進んだ辺りの左手に、「羽後秋田佐竹家墓所」という標識がありますが、少し奥まっているので、見過ごすかも知れません。ここは江戸時代を通して秋田地方を領した佐竹家の墓所で、秋田佐竹家初代の義宣（よしのぶ）を中心に大きな五輪塔四基が、卒塔婆（そとば）形の石柵で囲まれ、正面には鳥居が建っています。高野山の典型的な「大名墓」です。

そしてその奥に、無数の五輪塔に埋もれるように佐竹義重霊屋があります。義重は秋田佐竹家の初代義宣の父です。

佐竹家は清和源氏の一門で、平安時代の十二世紀初めから中世を通して、常陸国久慈郡佐竹郷、今の茨城県常陸太田市を本拠地としたので「佐竹」姓を名乗り、付近一帯を支配した豪族で、義重は「佐竹」を名乗って十八代目に当たります。戦国の争乱期には勢力を伸ばし、秀吉から常陸国支配を認められ、五十四万石の戦国大名となりました。

佐竹義重霊屋の正面の柱には「常陸国佐竹為義重逆修造立之」「慶長四己亥十月十五日」と刻まれています。これによってこの霊屋は、慶長四年（一五九九）に、常陸国佐竹郷の義重が「逆修（ぎゃくしゅう）」つまり生前に自分の死後の法要を行い建てた、ということが分かります。

この時、義重はすでに家督を長男義宣に譲り、隠居していたのですが、常陸国の支配者として、まだ実権を握っていたようです。

霊屋は供養塔の覆い屋で、中には五基の宝篋印塔（ほうきょういんとう）が安置されているようですが、正面の扉は閉ざされ、残念ながら中の様子は見ることができません。

建物は正面が三間、側面と背面は一間で、切妻造り檜皮葺きです。正面の中央に扉を建て込み、その他の柱間には、卒塔婆形の角材をびっしりと建て並べています。その数は四十九本で、弥勒菩薩（ぼさつ）のいる兜率天（とそつてん）の宮殿の数「四十九」を表しているとされていて、奥之院を「弥勒の浄土」とする信仰に基づく、霊屋ならではの造形のようです。大名墓を取り巻く卒塔婆形の石柵も「四十九院（しじゅうくいん）」と称されています。

霊屋の隅の柱は角柱ですが、角を斜めに削り落とす「面取り」がありません。この時代の柱としては珍しく、四角な卒塔婆と意匠を合わせたようで注目です。

柱頂部に架かる頭貫（かしらぬき）の先端の木鼻には、雲、松、蓮、万年青などが、かなり立体的に浮き彫りで彫刻されています。建物には全面に彩色の痕跡が残り、卒塔婆も五色に塗り分けられていたようです。立体彫刻の木鼻や極彩色で彩られた建立時の姿は、桃山時代の息吹を放つ存在だったに違いありません。

霊屋建立の前年八月には秀吉が没し、翌年九月には天下分け目の関ヶ原という、その時、「鬼義重」と呼ばれた勇猛な武将義重は五十三歳。何を思い、何を願って、遠く離れた高野山で逆修供養を行ったのでしょう。

義重と義宣は父子の確執もあって、関ヶ原の戦いでは東西両軍のどちらにも与（くみ）せず、そのことが家康の勘気に触れ、常陸五十四万石から羽後秋田二十万石に転封となったのです。

義重は逆修供養から十三年後の慶長十七年（一六一二）に秋田で生涯を閉じました。

高野山の文書（二十二）

初紹介!! 「関東御教書」について

今回紹介するのは、「綸旨院宣」（未指定、金剛峯寺蔵）と題される巻物に所収している文書です。文書とは別紙、別筆で「後堀川院」とあり、「後堀河天皇綸旨」と認識されていたようですが、「関東御教書」と呼ぶのが正しいでしょう。関東御教書は、鎌倉幕府が用いた三種の文書のうちの一つで、執権と連署が（連署がいない場合は執権のみ）が奉者に伝達するものである。貞応二年（一二二三）二月十六日　前陸奥守（花押）　金剛峯寺へ」とあります。『紀伊続風土記』によると、大塔は、貞応初年頃には破損が甚だしく、貞応元年（一二二二）良印がこれを嘆いて朝廷、幕府のお墨付きを得て勧進を行っていました。それを後押しするために和泉国下池田郷（大阪府和泉市の一部）を寄進したとのことです。奉者の「前陸奥守」は、前年に陸奥守を辞任した二代執権北条義時（一一六三～一二二四）です。連署は、元応三年（一二二四）に設置されたため、本文書は、義時一人が奉者となっています。義時は承久の乱で幕府方の総大将として、勝利をおさめたことで有名な人物です。勧進僧の良印は遍照光院の八世です。この時の良印による大塔勧進活動は十六年間も続けられ、暦仁元年（一二三八）にようやく大塔の落慶となりました。また良印は、仁治元年（一二四〇）から実施された西塔修造の勧進でも活躍したことが知られ、四十二代金剛峯寺検校（高野山住山の僧のトップ）にもなっています。

実は『紀伊続風土記』には、本文書とほぼ同じ文書が紹介され、それを引用という形で『鎌倉遺文』（三〇五二号）にも収載されています。本文書との大きな違いは、「下池田郷」が、『紀伊続風土記』では「池田郷」となっているくらいですが、紹介文に「泉州下池田郷を賜ふ」とあるので、「下池田郷」が正しく、『紀伊続風土記』の誤植でしょう。この『紀伊続風土記』紹介の文書は、国宝『宝簡集』等にも収められておらず、本文書が元である可能性があります。

本文書は展覧会や図録などでも公開されることはなかったようで、今回が初紹介となります。本文書の花押が、その他の義時の花押と一致しないこと等、本物なのか偽文書なのかも含めて、検討が必要ですが、今後の研究の一助になればと思います。

（研谷　昌志）

※今回紹介した文書は冬期平常展で展示いたします。

未指定　関東御教書　金剛峯寺

【釈文】
高野山大塔五畿七道
致勧進可造立之旨良印
上人被仰付畢大衆合力
早速可遂成風之功者為
新寄進泉州下池田郷遣之
全可寺納弥可抽国家快楽之
丹誠者也仍執達如件
貞応二年二月十六日　前陸奥守（花押）
金剛峯寺

高野山の生き物　第四回

ルリボシヤンマとオオルリボシヤンマ（開創前の高野山の姿を今に見る）

高野山寺領森林組合　西田　安則

皆さんは、弘法大師が修行の場として高野山を開いたのは良くご存知だと思います。しかし、弘法大師が開く前の高野山がどんな姿だったかは誰も知るよしもないところです。

ところが、当時の高野山の姿を教えてくれる生物がいます。それが今回ご紹介するルリボシヤンマとオオルリボシヤンマです。

立秋に入ってもまだまだ、残暑が厳しい高野山。高野山の随所で見られる池では、青色の斑紋のある大きなトンボをよく見かけます。筆者が子どもの頃は、オオルリボシヤンマのことをイケと呼んでいました。おそらく池に産卵に来るトンボの中で一番大きく格好が良かったことから、生息環境がそのまま呼び名になったのではないかと思います。一方ルリボシヤンマは、オオルリボシヤンマより一回り小さく、大きな池には訪れず、林に囲まれた小さな水たまりのような池で産卵します。そのためか、地元の子ども達にもあまり知られた存在ではありませんでした。

この二種類のトンボは比較的寒冷な場所に生息しており、特にルリボシヤンマは西日本では、高野山のような高地の湿地や小さな池があるところに局地的に生息しています。

このことから、西から東に流れる御殿川周辺に拡がる湿地帯に、大小様々な池が点在し、この二種類のトンボが飛び廻っていた、そんな原生の高野山の姿が推察されます。

高野山では、池が改修されたり埋められたり、また残っていても鯉が入れられたりと、トンボ達にとっては厳しい状況です。特に不安定な小さな池に産卵するルリボシヤンマは危機的な状況で、一年に一個体を見るか見ないかです。弘法大師も見たと思われる、氷河期の落とし物のトンボが、何時までも高野山の空を飛び廻れる環境を残していきたいものです。

ルリボシヤンマ

オオルリボシヤンマ

ルリボシヤンマ生息地